

## 令和2(2020)年度 第2学期終業式 式辞

全校生徒諸君、おはようございます。

9月に一斉登校を再開して、今年度になって初めて「全校生徒諸君」に呼びかけることができました。そして今日まで、そのまま一斉登校を続けることができました。

皆さんも気にかけていると思いますが、第三波と言われる昨今のコロナウイルス感染状況は、これまでにないような厳しさを示しています。社会全体の動向を見るに、感染を抑えることが待ったなしの課題であるのは論を待たないとしても、経済の動きを止めることで人々の生活を窮地に追い込んでしまうことも深刻な懸念材料であり、その狭間で各界は何とも苦しい対応を迫られています。「新しい生活様式」は私たちに様々な制限を強いるものですが、実際にどの程度まで許されるのかについては様々な解釈がなされ、現在のような非常に厳しい状況に結びついているのだと思います。それを“慣れ”に基づく“甘え”であると断罪することは簡単ですが、現状を如何に好転させていくかを考えると、話はそう単純なものではないわけです。いずれにせよ、私たちには、危機的状況を訴える様々な声に、当事者意識をもって耳を傾けることが求められているように思います。自らが不安感を持っていれば、他者を思いやることは非常に難しくなるものですが、そのことをはっきりと意識した上で、落ち着いて自分の言動を省みつつ世界の情勢を評価してみましょう。

その意味では、この2学期に見られた諸君の行動様式は、概ね高く評価してよいものであったと感じています。諸君が、要所では常に危機感を失うことなく行動したからこそ、一斉登校を続けることができ、学校の様々な学びの活動を実際に行うことができたのです。特に、文化祭が対面形式で実現できたことは意義深かったと思います。文化祭実行委員を中心に参加したすべての諸君が、中止という事態まで想定した上で、綿密な準備を行ったことも然ることながら、より望ましいあり方を追求して思考をやめなかったことが、殊更高く評価されるべきだと思っています。文化祭で対面形式とオンライン形式を融合させた試みが、どのような効果を生むものであったかを、じっくり時間をかけて自己評価してほしいものです。それが、駒場東邦の新しい学びの様式の実現に、大いに示唆を与えるものであると考えます。期待しています。

もちろん、授業を主とした教科学習のうちの一定程度が、デジタル技術に依る部分となることの影響についても、これから注視していく必要があるだろうと考えています。

そもそも、情報を瞬時に共有できることには、功罪両面があると思われれます。人と人とのコミュニケーションのあり方がどのように変化するのか、個人にまつわる情報をどこまで踏み込んで共有することができるのか、それをもっと大きくとらえれば共同体の構成がどんな風が変わっていくのか、またそこでのいわゆる“伝統”をいかに伝承していくか、熟練によって到達できる境地はどうすれば守り伝えることができるのか、あるいはそれらが担ってきたものを新しい共同体が果たして担っていけるのか、等々、考えはじめればきりがありません。

そんなことを考えながら、視点を日々の学習にフォーカスしたとき、ひとつの興味深い研究・考察に行き当たりました。それは、「手書き」と「タイピング書字」との違いを脳神経の側面から研究したものです。大脳皮質の前頭葉にある「ブローカ野」は「運動性言語中枢」と呼ばれ、発語を司る領域です。それは、声帯や舌・唇等のコントロールだけでなく、文字を書く際の手指の巧緻な運動や空間構築性・リズム性にも関係し、文法機能にも影響すると言われています。そのブローカ野における文字や文章を書く際の血流量を「手書き」と「タ

イピング」で比較したところ、「手書き」の方が「タイピング」に比べて明らかに大きい数値を示したのだそうです。しかも、「写字」よりも「自発書字」の方が、差異が顕著であるという結果が得られたとのことでした。血流量の増加はシナプス結合の活発化を促し、学習の定着や発展性につながるのだそうですが、これは単に学習効果だけにとどまらない話だと思います。つまり、言葉は思考そのものである、と考えたときに、「手書き」から「タイピング」への変化は、思考のあり方自体が変化していくことであると考えられるのではないかと思います。それがどのような変化であり、どんなところに影響してくるのか、そしてその変化を私たちはどんな風に迎えれば良いのか、まさに揺らぎの中に今があるような気がしています。現今の世界の思想の方向性について考えるに、強く言い切る言説によって、その揺らぎや覚束ない感じが糊塗されて見えなくなっている恐れを覚えます。もちろん、だからといって、「手書き」に戻すべきだと言って片付けるつもりはありません。世界と瞬時につながるツールを持った私たちは、そこで如何にバランスのとれた思考方法を身につけていくか、それを課題とするべきだと思います。授業を通じて共に考えていきましょう。

敢えてひと言つけ加えるなら、文化祭を対面形式とオンライン形式の融合で行えたのは、この意味でも象徴的であり、意義深いものと思っています。君らが情熱を傾けて研究し創造したパフォーマンスが、オーディエンスにはどんな風に伝わっていったのでしょうか。それを振り返り考察することは、新しい文化がどのようなバランスの上に成り立つかを考えていく端緒となるような気がするのです。

さて、6年生はいよいよ“決断”の時ですね。進路選択の真価が問われる、という意味で“決断”と表現したのですが、自分で決めた進路を目指して、最後までその意志を貫いてほしいと思います。正直言ってなかなか自信が持てないという人もいるのでしょうか。しかし、力を尽くして立ち向かえば、必ず何かしらの形で展望が開けてきます。それを信じて取り組んでください。

また、本来なら、学校に来て、6年間共に学んだ友人と励まし合いながら取り組んでほしいと言いたところなのですが、今年はそれがなかなか難しいです。それでも、意識の高い友人たちと切磋琢磨したからこそ今の自分があるのです。自宅に一人でいても、その基盤は強固であり、それが君らの底力なのです。そう思って日々励んでください。

皆さん、ステイホームの年末年始となります。静かにじっくりと本を読んで思考を深めてみたいものです。それは自分自身をじっくり見直してみることにつながるので、休み明けに再会した皆さんはちょっと違う感じになっているのではないかと楽しみです。良いお年をお迎えください。

令和2(2020)年 12月 26日

駒場東邦中学校・高等学校

校長 小家 一彦